

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520318

研究課題名(和文) 現代ハリウッド映画とショック効果：イメージはネオリベリズムをどう表象するのか

研究課題名(英文) Contemporary Hollywood Cinema and Shock Effect: How Does Image Represent Neoliberalism?

研究代表者

吉本 光宏 (Yoshimoto, Mitsuhiro)

早稲田大学・国際学術院・教授

研究者番号：80596833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：現代ハリウッド映画に特徴的なスペクタクルは、どのような方法で過剰とも言える視聴覚的刺激を観客に与えているのか、またそれが生み出すショック効果は何を意味しどのような効果を生みだしているのかを、新自由主義や後期資本主義、さらにグローバル規模で民主主義が袋小路に追い込まれている危機的現状と関連付けながら、理論の構築および具体的な作品分析を通して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to examine contemporary Hollywood cinema in relation to neoliberalism and global capitalism. It specifically focuses on audio-visual spectacle and shock effect, and tries to answer the following questions. How are they created for what purpose? Is it possible to see any connection between cinematic shock effect and neoliberal "shock doctrine"? What can they tell us about the state of media environment or media ecology in the age of global capitalism?

研究分野：人文学

キーワード：ハリウッド アメリカ研究 映画研究 スペクタクル ショック効果 新自由主義

1. 研究開始当初の背景

英米圏の映画研究、メディア研究、それに文化研究では、ハリウッドのブロックバスター映画やイメージの商品化について、すでに相当数の学術書や研究論文が書かれている。しかし、現代ハリウッド映画を総合的に検討した研究となると、他の研究トピックと比較した場合それほど多いわけではない。

研究代表者は、これまで長く現代ハリウッド映画研究に取り組み、*Quarterly Review of Film and Video* を始め *South Atlantic Quarterly* や *boundary 2* さらに *Inter-Asia Cultural Studies* などに、ハリウッド映画やディシプリンとしてのフィルムスタディーズに関する英語査読論文を発表してきた。また平成19年に単著書『イメージの帝国/映画の終わり』を、平成24年に単著書『陰謀のスペクタクル』を出版している。

『イメージの帝国/映画の終わり』は、グローバル規模で起きているメディア・映画環境の変化を理解するために、ハリウッドのブロックバスター映画に着目し、理論的そして歴史的観点から考察した。『イメージの帝国/映画の終わり』が現実のスペクタクル化とハリウッド映画というスペクタクルの現実のあいだの関係を明らかにしようとしているのに対して、『陰謀のスペクタクル』では、アメリカ映画と《陰謀》という主題に注目し、おもに次の3つの問題と取り組んでいる。(1) 陰謀論を構成する基本的な要素、すなわち極端な二元論や絶対的な敵対性が、冷戦体制からグローバルな新自由主義的現在への移行過程において、どのように変化し新たな意味を持つようになったのか。(2) メディアとしての映画と陰謀論の連関において、『覚醒』や『催眠術』、『暗示』、『不気味なもの』といった主題は、どのような機能を果たしているのか。(3) 現代ハリウッド映画は、陰謀論の主題系を利用して、いったい如何なる政治的無意識を表象しているのか。つまり『陰謀のスペクタクル』は、ハリウッド映画とアメリカの政治的無意識が《陰謀》という主題を媒介にして互いに引き寄せ合うメカニズムを、具体的な映画作品や理論的テキストの精読を通して明らかにしようとしたプロジェクトであると言える。

これらの研究には新自由主義とスペクタクルという主題が通奏低音のように流れているのだが、それをより深く掘り下げて考察し理論的に分析したいというのが、本研究を始める契機となった。

2. 研究の目的

本研究は『イメージの帝国/映画の終わり』と『陰謀のスペクタクル』で達成した成果を踏まえ、以下の3つの課題に取り組む。

(1) 現代ハリウッド映画、なかでも特にブロックバスターといわれる映画は、なぜ観客に過度の刺激を与えるスペクタクルを多用するのか。(2) なぜ現代ハリウッド映画

は、『境界』をめぐる二項対立、さらにその不明瞭さに取りつかれているのか。(3) 現代ハリウッド映画のスタイル的および物語的特徴と新自由主義やグローバル資本主義のあいだには、何らかの相関関係があるのか。

これらの問いに答えることで、現代ハリウッド映画に特徴的な物語構造や固有のスタイル的特質とその重要性を明らかにすること、さらに新自由主義的システムのなかでのハリウッド映画の役割を検証することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

理論の構築および作品分析を通して、上記の目的を達成する。具体的な研究方法は次の通りである。

(1) まずは少なくとも二つの領域における理論的探求が必要である。

(a) スペクタクルの理論的考察：古典的なテキストも含めて、映画理論がスペクタクル、ショック効果、物語構造、仮想現実などの問題をどのように論じてきたのかを検証する。多くの現代ハリウッド映画は、どのような方法で過剰とも言える視聴覚的刺激を観客に与えているのか。こうしたショック効果は何を意味し、観客はどのような影響を受けているのか。現実と夢、現実と虚構現実、善と悪、外部と内部、過去と現在などの二項対立によって構築される《境界》は、なぜたんに肯定されたり侵犯されたりするのではなく、あいまいになるのか。強迫観念的に反復される《境界》とその両義性は、どのような主題と連結し物語を形成するのか。

(b) 新自由主義の理論的考察：新自由主義にかんしては膨大な量の文献が存在するが、そのなかから人文学や哲学、批評理論と接点のある文献を探し出し、根本的な特徴を抽出する。新自由主義とは何なのか。どのような形態的要素が新自由主義を構成するのか。新自由主義とグローバル資本主義のあいだには、どのような関係性が存在するのか。

(2) つぎに具体的な映画作品の分析を通して(a)と(b)でおこなった考察を統合する。これは個々の作品の分析や解釈という形を取る一方、たんなる映画批評ではなく、メディア論としても行われなければならない。現代ハリウッド映画は、新自由主義が支配的な世界に生きる観客の知覚の変貌を表象するのか。あるいは観客の知覚そのものの変化をもたらす媒体としても機能するのだろうか。加速度的にネオリベラル化する世界の現実と、グローバル規模で民主主義が袋小路に追い込まれている危機的状况の中で、現代ハリウッド映画がメディアとしていかなる役割を果たしているのかを、理論的考察と作品分析を統合することで明らかにしていく。

4. 研究成果

平成24年度は、(1) 現代ハリウッド映画が多用するショック効果の種類を分類し、それ

らがどのような手法によって生み出されているのかについての予備的考察を行うこと、そして(2)新自由主義と呼ばれる経済システム、社会制度、統治形態を直接あるいは間接的に論じた文献を読み進めながら、現代ハリウッド映画との接点を探ること、の二つを目標に研究をおこなった。新作ハリウッド映画の鑑賞・分析、DVDなどの映像資料の調査/収集/テキスト解釈を通して判明したことは、ショックをたんなる視聴覚的效果として捉えるのは誤りだということである。多用されるCGやデジタル・サラウンド音響が重要であることは否定できないが、現代ハリウッドのショック効果を純粋なテクノロジーの問題に還元できないことは明らかであり、ジャンルや作家性の枠を超えて繰り返される主題や登場人物の造形、物語のパターンや構造に細心の注意を払う必要があることを再確認した。特に注目したのが、「絶対的暴力」、「必要な嘘」、「操作される時間」という3つの主題である。これらの主題はたんに生理的ショックを生み出す契機として機能するだけではなく、新自由主義の様々な側面を表象可能にするアレゴリー的要素としても解釈できるからである。「必要な嘘」という主題に関連しては、クリストファー・ノーラン監督の『バットマン ビギンズ』と『ダークナイト』を分析した論文を執筆し、『ユリイカ』(2012年8月号)に発表した。(雑誌論文)

平成25年度は主に前年度の研究成果をふまえて(1)「絶対的暴力」、「必要な嘘」、「操作される時間」という3つの主題をさらに理論的に発展させること、当初の研究計画書にもとづいて(2)現代ハリウッド映画に繰り返し登場する《境界》という物語の主題とその両義性の意味を明らかにするという課題に取り組むことを中心に研究活動を遂行した。現代ハリウッド映画の具体的な作品を、《境界》の両義性という主題とそのヴァリエーションや、時間の複雑化、商品化された時間体験などに注目しながら精読するという作業を続けると同時に、一年を通じて新たな資料を収集し、さらに8月にはニューヨーク大学での文献調査および映像資料収集のために米国へ出張した。平成24年度にはショックをたんなる視聴覚的效果と同一視するのは誤りだということが明らかになったが、本年度の研究によって、現代ハリウッド映画のショック効果は物語とスペクタクルという対立を根源的なレベルで無効化するのではないかという仮説を立てるに至った。正義と暴力、ポスト冷戦時代とアメリカの相対的凋落という問題が現代ハリウッドによってどのようにアレゴリーとして表象されているかを考察するために、マーベル映画、その中でも特に『キャプテン・アメリカ/ザ・ファースト・アベンジャー』(2011年)に焦点を当て、スーパーヒーローと新自由主義の関係を分析した論文を執筆し、『ユリイカ』

(2014年5月号)に発表した。(雑誌論文)

また、「不可視のスペクタクル」という一見すると矛盾した概念の可能性を探究するために、映画と放射能という主題に注目し、“Radiation, Spectacle, and the Invisible Everyday”というタイトルの招待講演を、平成25年11月に韓国の延世大学でおこなった。(学会発表)

平成26年度は、これまで蓄積してきた研究成果を整理し、さらに正義、自由、偶然などの概念を具体的な映画作品のスタイルの特徴や物語の構造と関連付けて精査し、現代ハリウッドと新自由主義との関係を明らかにしていくという課題に取り組んだ。また7月の終わりに米国へ出張し、ニューヨーク大学の図書館で文献調査を行った。これまでの研究成果の一部である、ショック効果が映画的時間に及ぼす影響その中でも特に現代ハリウッド映画の複雑化する時間についての考察を論文の形にまとめることに多くの時間を費やした。複雑化しパズル化する現代ハリウッド映画の新自由主義的といえる時間空間の意義を正確に理解するためには、エイゼンシュテインを含めた古典的映画理論にまでさかのぼって映画的時間空間の構築について考え抜くこと、さらに映画の枠を超えて建築や都市風景を含めた他の表象システムによる時間空間の分節化と関連づけて映画的時間空間を吟味することの必要不可欠性が、論文の執筆過程で明らかになった。現代ハリウッド映画の新自由主義的時間空間を明らかにするための予備的考察としておもにノエル・バーチとスティーヴン・ヒースの理論の可能性と限界を批判的に検討し、デヴィッド・ハーヴェイの時間空間理論の映画理論的可能性を論じた論文を発表した。(雑誌論文)

加えて現代ハリウッド映画は新自由主義をどのように可視化あるいは知覚可能なイメージとして分節化するかという問いに具体的な作品を考察することで答える論文を書き進めた。

平成27年度は、おもに論文執筆および学会発表に重点的に取り組んだ。まず5月にオーストラリアのシドニー大学の招待を受けて、“There Is No Alternative?: Dystopia of Capitalism in Contemporary Hollywood Cinema”と題する講演をおこない、現地のアメリカ研究専門家と交流する機会を得た。(学会発表)

12月には早稲田大学において「ネオリベラリズムと視覚性」(Neoliberalism and Visuality)とテーマでワークショップを開催し、申請者自身および東京大学で教える研究者の発表に加えて、ニューヨーク大学から視覚文化研究の専門家を招聘し講演をお願いした。またニューヨーク大学からの研究者には、申請者の所属する大学院研究科の学生とのミーティングに参加してもらい、アメリカにおける映画やメディア文化研究の現在の動向を中心に関連したトピックについて

話をしていただいた。出版に関しては、雑誌論文 を執筆し発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Cinematic Repetition and Neoliberal Subjectivity.” *Transcommunication*.

3-1 (March 2016): 123-135. 査読無

YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Cinematic Space and Time in the Age of Neoliberalism.” *Transcommunication*.

2 (March 2015): 23-37. 査読無

吉本光宏、「キャプテン・アメリカ、あるいはグローバル資本主義と自己言及化するスーパーヒーロー・ジャンル」『ユリイカ』、第46巻第5号、85-91頁、2014年5月、査読無

YOSHIMOTO Mitsuhiro. “A Future of Comparative Film Studies.”

Inter-Asia Cultural Studies. 14.1

(March 2013): 54-61. 査読有

吉本光宏、「嘘の時代」『ユリイカ』、第44巻第9号、94-101頁、2012年8月、査読無

[学会発表](計3件)

YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Cinema and Neoliberal Subjectivity.” Workshop on Neoliberalism and Visuality. Waseda University, 19 December 2015.

YOSHIMOTO Mitsuhiro. “There Is No Alternative? Dystopia of Capitalism in Contemporary Hollywood Cinema.” The U.S. Studies Center, University of Sydney, 13 May 2015. 招待講演

YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Radiation, Spectacle, and the Invisible Everyday.” Yonsei University, Korea, 5 November 2013. 招待講演

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉本 光宏 (YOSHIMOTO Mitsuhiro)

早稲田大学・国際学院・教授

研究者番号：80596833